

## 古墳壁画の保存活用に関する検討会（第 20 回）議事要旨

1. 日時 平成 28 年 6 月 10 日（金）15:30～17:00

2. 場所 明日香村立中央公民館 2 階会議室

3. 出席者（委員）

和田座長，梶谷副座長，大石委員，尾登委員，小林委員，西藤委員，佐藤委員，  
染川委員，高鳥委員，成瀬委員，林部委員，三浦委員，三村委員，宮下委員，  
森川委員，矢島委員

（事務局）

文化庁：中岡次長，齊藤文化財鑑査官，萬谷美術学芸課長・古墳壁画室長，加藤記  
念物課長・古墳壁画室サブリーダー，光石記念物課長補佐，朝賀主任文化  
財調査官，建石古墳壁面对策調査官，五島文化財調査官，近江文化財調査  
官，宇田川文化財調査官，横須賀文化財調査官 ほか

独立行政法人国立文化財機構

東京文化財研究所：岡田保存科学研究センター長，早川保存科学研究センター副  
センター長，吉田保存科学研究センター保存環境研究室長，  
犬塚保存科学研究センター分析科学研究室長，早川保存科学  
研究センター修復材料研究室長，佐藤保存科学研究センター  
主任研究員，川野邊特任研究員 ほか

奈良文化財研究所：玉田都城発掘調査部長，津田研究支援推進部連携推進課長，  
内田文化遺産部遺跡整備研究室長，高妻埋蔵文化財センター  
保存修復科学研究室長，石橋飛鳥資料館学芸室長，中島文化  
遺産部主任研究員，降幡都城発掘調査部主任研究員，廣瀬都  
城発掘調査部主任研究員 ほか

4. 概要

（1）開会

（2）委員及び出席者紹介

（3）議事

・光石補佐から，委員の異動について報告があった。

① 高松塚古墳及びキトラ古墳の保存活用について

・萬谷課長から資料 2 に基づき，高松塚古墳壁画・石室石材の保存管理及び公開施設に関わるこれま  
での議論の整理と今後の課題について前回資料の修正報告があり，次のとおり意見交換が行われ  
た。

森川委員：前日も申し上げたが，我々、明日香村全体を歴史展示する中にこの施設も位置付け  
ていきたいという思いがある。是非，検討いただきたいことで，古墳壁画がアジア全  
体，あるいは日本の歴史の中でどう位置付けられているかを分かっていたくような  
展示の在り方についてももう少し書いていただきたいと，ずっと思っている。調査研究  
機能をもっと強調してほしいとの気持ちを申し上げたところ，文字を入れていただ  
いた。東アジア全体をもっと学んでいただけるような用意が必要だという思いを強く  
している。

佐藤委員：日本の壁画古墳全体，それとアジアや世界の同じような壁画古墳も理解できるよう

な、特にアジアの壁画は日本列島に直接影響を及ぼしたものだと思うので、そういった視点も必要だ。展示については、保存のための苦勞を紹介したり、保存科学の成果を発信する機能をもたせてはと思った。

和田座長：保存科学の成果発表として、日本文化財科学会での発表があったと聞いている。今度、世界考古学会議でも話はあるのか。

建石調査官：折々に学会発表など行っており、世界考古学会議では古墳壁画のセッションを予定している。

西藤委員：本日、キトラの展示室を見せていただき、お墓の匂いがしないと感じた。古墳の本質は葬送儀礼の意味が含まれ、キトラはこれとしても、特に今度高松塚の公開施設をつくられるときにはお墓の意味を伝える必要はあるのではないか。

建石調査官：地階展示の、墳丘の造り方の中に葬送儀礼に関することを映像や模型を使って説明しているコーナーがある。古墳現地とどうつないでいくかなど工夫をしていきたい。映像を使ったコンテンツは、リニューアルが折々にできると考えている。

小林委員：今日見せていただいた中からいくつか申し上げたい。1つは、楽しい体験館ができてよかったと思った一方、手で触れるような展示など全ての人に開かれた情報発信の姿勢をもう少し進めてよいかと感じた。それから、上階の展示は保存と公開の中で工夫と苦勞を感じる。ただ、空間の照明がどうなるのだろうか。体験館が非常に楽しく、古代の感じを体験できるものであるのに対し、実験室のようで、壁画がそもそもあった雰囲気など、高松塚における課題になろうかと感じた。

宮下委員：もしかして「つまらない施設なのでは」と心配していたが、楽しく拝見させてもらった。今後更に手が入って、理想的な形に持っていかれるだろう。それを踏まえ、高松塚に向けての要望として、キトラのレプリカは恐らく日本の中でも最高精度を持ったものだと思う。高松塚では、レプリカの重要性は更に増す。オリジナルはオリジナルで管理し、公開する一方で、クローンと言ってもいいぐらいの高精度のものを中心にしたような企画が期待される。

和田座長：装飾古墳に関するワーキングを開催したときも、レプリカの活用は今後非常に重要になるだろうと思ったが、大いに利用していきたい。

- ・五島調査官から資料3に基づき、キトラ古墳指定地内の安全対策について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

和田座長：南側斜面は、40度近くの角度があるのか。

五島調査官：40度はないと思うが、特に左側の乾拓板前あたりが一番急なところになる。

西藤委員：柵が必要だと思うが、手前の急カーブの柵を延長してもよいかと思う。墳丘が位置的に高く、もとの地形に戻したといえども造った地形なので、もっと安全を確保した方がいいのではないか。

五島調査官：状況を確認しながら、改善をしていきたい。

佐藤委員：急傾斜のカーブのところ目立たなければいけないこともあるが、個人的な意見ながらソフトな今の案のような方がいいかと思った。

三村委員：安全対策について、歩く以外にベビーカーを押される方や車椅子の方がいらっしやったり、例えば将来的にセグウェイを導入したりすれば、安全対策は変わってくる。

大石委員：今は、自転車なども進入禁止とはしていないが、傾斜がきついところは乗って入ることはないだろうと思っており、セグウェイとか自動的に上がるものは想定していない。将来、安全対策がもっと必要だということになれば、やっていくしかないと思っている。当面の対策としては、使ってみながらの対応と考えているところ。

西藤委員：歩道の真ん中に溝というか排水溝があり、より歩きにくくしている。そこにつまず

いたとき、ロープの方へとなることも心配。

五島調査官：適宜対策を施していくことを考えていきたい。

和田座長：通る手段がどんどん変わっていくかもしれない、使っていく中でできるだけ素早く適切な対処をしていただけるようお願いしたい。それは建物の中も同じで、こう決めたからとできるだけ言わずに改良していただければありがたい。

- ・ 建石調査官から資料4に基づき、壁画公開について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

和田座長：キトラ古墳は、公開期間中に点検を入れないといけないか。ずらせないのか。

建石調査官：集中的に点検する日を、本当は週に1度とりたいところだが、2週間に1回、国営公園の来客が少ない曜日を選んでいる。

和田座長：初めて行ったのに1階を見られないのは、がっかりする人が多いのではないか。

建石調査官：壁画を見るのは事前予約制なので、それを知らずに来館した方へのケアをきちんとしないといけないと考えている。

宮下委員：点検とは、具体的に何をするのか。

建石調査官：具体的な話はこれから検討する。例えば東京国立博物館で展覧会を行ったときは、夜間や早朝の作業となったが、展示ケースの上から超拡大の接写をし、表層の目では見えないようなしっくいのはずきとかをチェックするなどをしてきた。

宮下委員：複数名でされたのか。

建石調査官：毎日、文化庁、東文研、奈文研、東博、装演師連盟の複数のメンバーで同時に行った。

小林委員：地階は休館日はなく、ずっと開いているのか。それと、この館は無料なのか。

建石調査官：無料。

大石委員：館の方は、基本的には年末年始を除いて休みはなくやっている。これは飛鳥歴史公園やほかの公園館も含めて同じ扱い。

佐藤委員：いくつか質問やお願いがある。そのまま上の階から入ってきてしまう人がいそうなところ、メインエントランスは下の階だと案内などを出して誘導したほうがよいのではないか。それから、現地の墳丘もぜひ見ていただきたいので、どこかで誘導してほしい。公開の予約を海外の方や遠方の方がされたときに、キトラは当選したけれども高松塚は落選したという人がいると気の毒だというのは気になっている。加えて、上の階の休みの日でも、何かしら展示をして、パネルや画像など文化庁の施設としての何か宣伝を見て満足していただくということではできないかと思った。

建石調査官：サインについては、建物内に「古墳へはこちら」というような矢印等を考えており、もう少し強調していきたい。

染川委員：お客さんの立場で言うと、四神の館に来て満足するというのを基本にして、「閉まっていた、すみません」ではなく、「四神の館ですごく楽しかったし、今度は上を見に来よう」という展開の方がポジティブに捉えてもらえると思うので、例えば「壁画保存研究室」と特別感を与えて、ちょっと垣間見させてもらおうかみたいな感じにうまく整理ができたらいいのではと思った。

建石調査官：上の階の閉室期間中も、可能な範囲で出土品等を御覧いただく仕組みとしたい。

和田座長：いろいろ工夫して、うまく誘導し、最後は古墳も見ていただいて帰っていただける形を考えていただきたい。キトラ古墳の四神の館と高松塚の修理事業室との間をどうやって移動してもらうかということは、自転車や徒歩など、何か考えられているか。来た人にお任せにせざるを得ないのか。

森川委員：観光用の周遊バスで、秋以降キトラを回るルートを用意できないかと、奈良交通と調整している。言おうか迷っていたことだが、四神の館に来られる人の最大の目的は

壁画を見ることだろうと思う。展示室で壁画を公開していないときでも、展示室の公開を検討していただきたい。点検等の作業の時には閉室しなければならないかと思う。

また、バス等の移動手段を用意したいと思うが、展示室の使い方に応じた議論かと。

和田座長：公開のときと公開していないときの保存管理施設での作業の仕方がもう少し分かれば、その間はやはり閉めといた方がいいなど分かるだろう。年4回、四半期ごとの公開をやっていないときはずっと何か作業をしているのか。

建石調査官：作業というより、むしろ収蔵、保管されている時間の方が長いと思われる。

和田座長：要するに、光を当てたりせずに、眠らせておくというか。

建石調査官：収蔵庫と展示ケースが一体になっているようなものなので、どう考えるは難しい。

例えば9月24日からの展示では、まず壁画への光の当て方は相当調整が必要。それと、斜めにすれば当然物理的なストレスがかかる。壁画の安全を確保した上で、30度にするかどうかは別にして、見やすくするための措置も負荷をかけることになる。

和田座長：重要文化財の美術品は、1カ月ぐらしか公開できないのか。

建石調査官：基本は60日を上限としているが、脆弱な文化財は30日。壁画については、脆弱な文化財の取扱いで30日。実際、内覧会を2日間予定しており、合わせると30日になる。

森川委員：私から論点としたのは、閉室するかどうかの確認。

建石調査官：少なくとも出土品については、何らかの形でなるべく多くの方に見ていただけるようにしたいと思っている。今日も自動扉から入っていただいたが、この扉を閉めるという意味の「閉室の日」はなるべく少なくしていきたい。

西藤委員：職員や研究員のようなマンパワーの配置はあるのか。

萬谷課長：保存管理施設がオープンするため、研究員1名を措置し、ほかに公開に必要な数名をあわせ、スペースの問題で、常時そこにいられるかどうかということはあるが、壁画の状態調査などに関する研究の方は措置している。

和田座長：見せていただいた壁画の置いてある台があったスペースの向こうに準備室があるのか。

建石調査官：準備室、小さい学芸室と、あと出土品を保管したり、多少執務室的には使えるスペースがある。

和田座長：常時いるようなところではないのか。

建石調査官：日中は常に人がいることを念頭に置いている。

小林委員：公開期間は前の方のガラスに近い方は光が当てられ、後ろの方にあるものは多分暗いままで置き、四半期ごとの公開についてローテーションが組まれるのか。

建石調査官：この秋の展示と、冬の展示は別のものを考えている。今、キトラの場合は5つ面があり、どうやって動かしていくかという話とも関わる。

小林委員：後ろの方にあるものについては、公開期間と見なさないという考えか。それでも、ローテーションを組み合わせながらずっと開けておくわけにはいかないという判断か。

建石調査官：そうである。

梶谷副座長：キトラの天井画の仕上げについてお聞きしたい。また、今日初めて青龍、白虎の壁画が大きく集められたところに大変感激したが、支持体はどうするか。既に後ろ側に何か付いていたように思ったが、あのような仕上がりになるのか。支持体によっては、展示するとき少し斜めにすることが可能ということにはならないのか。

川野邊特任研究員：御質問は、今の壁画の裏側がどうなっているかという意味か。

梶谷副座長：いや、細かく切り取られた状態を集めて原状に復そうとしているところ、まだ少し目立つように感じるが、どういうふうにされるのか。

川野邊特任研究員：天文図の両側の部分は大体目に障らないようになっていたと思うが、あのレベルまでは持って行く。技術的には、実際にはない部分とオリジナルの部分は目を近

付ければ見られる程度に抑える。全体の明るさは大分変わってしまったので、基本的には発見当時の白い状態を基本にして、自然すぎないように抑えていこうと思う。

梶谷副座長：支持体はどうされるか。

川野邊特任研究員：今の支持体は、ロハセルという非常に安定した固くて丈夫な合成樹脂を積層し、将来の修理に備えて、何段階かで外せるようにつくってある。

## ② その他

・近江調査官から資料5に基づき、熊本地震による装飾古墳等の被害について説明があり、委員より質問等はなかった。

・建石調査官と奈良文化財研究所・高妻室長から資料6及び参考資料3に基づき、宮城県・合戦原遺跡の線刻壁画について説明があり、次のとおり意見交換が行われた。

和田座長：この横穴は、埋葬が終わってから早い段階で、羨道部の岩盤が崩れて入口が塞がったと考えられ、現状では、後世の追刻はなしと判断しているというところで、飛鳥時代の終わり頃の人が描いたものと判断でき、非常に重要と言える。地盤自体が非常にもろく、現地に残しておくのは不可能に近いような形で、こういうふうに取り取って保存していただくというのも、1つの現実的な方法として十分あり得るものかと考える。この場所は、震災の復興住宅に充てられる場所であり、余計にこのような処置をとらざるを得なかったという面もある。

佐藤委員：天井や両側壁も剥がして、石室全体の雰囲気分かるように、何かしていただけないか。

建石調査官：佐藤委員が御指摘の点は、現地でも議論を重ねているところ。技術的に、特に天井は難しいというようなこともあり、奥壁の取出しに集中することを選択した。もちろん通常の図面と、相当細かいレベルで3D計測をして補っていきたい。

佐藤委員：3D撮影により、レプリカとしては原寸大の石室を再現できると思っていいのか。

建石調査官：可能だ。

佐藤委員：できれば羨道までやってもらえるとありがたい。

建石調査官：情報は周辺の地形も含めてとっている。

和田座長：天井と両側壁は、ごくわずかなのか。

建石調査官：円紋が少しある程度。

和田座長：3Dで全体測量しているので、立体復元も可能という形かと思う。

宮下委員：これまでの高松塚・キトラもそうだが、高精細のレプリカ製作は、今後重要になることは先ほど申し上げたが、復元についてCGではなくレプリカをつくると、非常にリアルな体験になるので考えていただきたい。私がイタリア・フィレンツェの壁画を修復した際、そこで得られた調査結果を基に1300年代の技法と材料で壁画1面を復元してみたところ、原作とはまた違ったリアルな感じを持つもので、是非、復元レプリカも考えていただきたい。

和田座長：今すぐの答えは難しいと思うが、引き続き様々な検討をしてほしい。

## (4) その他

事務局から、今年度の検討会は、今回を含めて3回程度開催したいと考えており、11月、12月の委員の予定を伺って次回の日程調整を行うことを連絡した。

## (5) 閉会

(以上)